

● 選評

小島なお

・ 堂城 幸太 (広島県)

空を食べようと思った

地平線に抜けた乳歯を並べた

数が足らへん

空を食べるには、最低でも空と同じ大きさの口が必要になる。地平線に並ぶ子どもは成長の生理にみなぎりつつ、空を欲望しているのかもしれない。

・ 村上 陽香 (北海道)

おなじ教室

ようかんみたいな空気に

今日もとじ込められる

みつしりと隙間なく餡を固めたようかん。甘く、つめたいその感触と密度に息もできない。切っても切っても、ようかんの断面みたいな教室の風景。

・ 佐々木佑輔 (埼玉県)

シャンプー香らない秋夜

情感のある秋の夜ならシャンプーが香りそうなのに。香らない。「秋夜」の硬質なひびきが、言葉でシャンプーを香らせながら意味で否定する展開に似合う。

・ 高橋ちひろ (宮城県)

ふかふかのソファにまどろみ

水をひとくち

心療内科の

ジャックオランタン

安息と不安のないまぜになった待合室でのひととき。この世と霊界のあいだに門が開かれるというハロウィーン。かぼちゃの目の奥はあかあかとした空洞だ。

・中矢 温(東京都)

マルボロやきつと

年賀状くださいね

煙草は秋の季語。マルボロに切れ字「や」を繋げた妙な魅力。年賀状を乞う間柄とはどんな距離感だろう。人間関係におけるそこはかとなない色気が漂う。

・さいう(愛知県)

ほたる色したコンビニに

祖母がいる

夜に発光するコンビニはまるでおおきな螢そのものよう。この世のしがらみから離れたようなひかりが静かな呼吸で祖母を包み込んでいる。

・吉富 快斗(埼玉県)

金琵琶を煩く感ずる日があつて

金琵琶はマツムシのこと。あえて金琵琶ということ、その声にかすかな金属的なひびきや東洋的な艶が加わり、余情が生れた。

・青野陽（熊本県）

星空の见えない星の尊さよ

君が作ってくれたチャーハン

星空もチャーハンも、眺めるときにその向こう側にあるものも同時に眺めているからこそ心が動く。见えないものを私たちは見ることができる。

・藤ほたる（神奈川県）

気に入った文字と

ひとつになれたらな

仰向けで上目遣いで 弓

まるで文字と性交するよう。相手が人であれ文字であれ、思いを遂げるといふのは心だけでは足りなくて、やはり身体も必要なのだ。身体性を感じる「弓」。

・藤色（京都府）

平たい月だ

レジャーシートは捨てて帰る

地べたに座るといつもと違う月との距離を感じることがある。レジャーシート

はもう二度と訪れない今日という日の象徴とも読める。